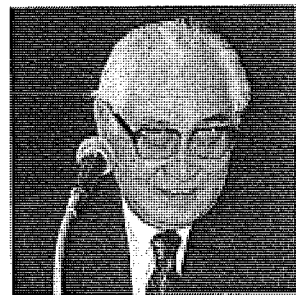


「新世紀を迎えるロータリーの姿」

本会議午後の部は、会場を劇場棟に移し、宜野湾ロータリークラブ泉恵徳指揮によるロータリアン達の元気良い歌声のロータリーソング（故郷よ 心も姿も美しく）斉唱で幕を開けた。

ロータリーソング斉唱に引き続き『新世紀を迎えるロータリーの姿』と題し、シンポジウムが行われた。沖縄県無形文化財紅型保持者の西平幸子先生作品の繊細で色鮮やかな琉球紅型の五枚の敷布が舞台

演出する中、加美山節バスターがコーディネーターを務め、松島寛容バスター（那覇西RC）日野晴雄地区職業奉仕委員長（東京中野RC）、村瀬泰雄地区社会奉仕委員長（東京小石川RC）、原田良康国際奉仕委員長（東京池袋RC）の4パネリストにより『21世紀を見つめたロータリーの本当の姿』をテーマに、制限時間ぎりぎりまで提言と活発な意見交換が行われた。



コーディネーター
加美山 節 バスター

「ロータリー2000活動 堅実・信望・持続」

それではこれから、シンポジウムの新世紀を迎えるロータリーの姿を始めたいと思います。

本日のパネリストには、ロータリー運動の四大奉仕部門の地区委員長さんにお引き受けいただきました。

さて、今年には紀元2000年です。カルロ・ラビツアR I会長は「21世紀を目前にして過去と現在の最良のものを整理統合する年」といたしまして、会長のテーマは【ロータリー2000活動は堅実・信望・持続】これに対応致しまして阿部ガバナーは地区のテーマとして、また特に本大会のために【明るく楽しく品位良く、かつ質素にして充実】を掲げておられます。

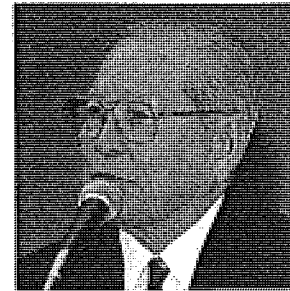
まず私が初めにこんにちに至るロータリー95年の歩みを大づかみに振り返ることに致しまして、それに引き続きましてこんにちのロータリーの置かれている真の姿、その問題点につつま

して、パネリストの方々から四大奉仕を柱に致しまして、それぞれ約15分ずつ核心に迫っていただきたいと考えております。

さて1870年のシカゴ大火のあと、孤独な青年弁護士のポール・ハリスが数年の熟考の末に3人の友達に呼びかけまして、1905年2月23日にシカゴ市ノース・デアゴン街N Tビル711号室に集まり、ひとつの業種について一会員という取り決めで、相互扶助と親睦を掲げこのロータリークラブを発足したわけでございます。ロータリーは95年経ちました間に、質量ともども偉大な発展をしてみましたが、他方クラブ数は増えても会員数は頭打ちという、ロータリーのマンネリズム化が懸念されておまして、四大奉仕の活性化、環境保全や次世代の教育等々、新しいニーズに応えての飛躍が期待されております。

科学技術の発展、あるいはグローバル化の進展など変化の時代に、最適のロータリーをいかに築くか、これからパネリストの皆様

のご意見を伺いたいと存じます。それではまず松島さんの方からご発言をお願い致します。



パネリスト
松島寛容 バスター
地区クラブ奉仕委員長（那覇西RC）

「ロータリー精神は 心の問題から」

どうもお久しぶりでございます。

今日は加美山さんからクラブ奉仕について、少しは全般的な話もと仰せつかっております。クラブ奉仕のことにつきましては、もう皆様熟知しておられますので、いまさらと思えますけれども、ご一緒にひとつおさらいをさせていただきたいと思えます。

ロータリアン必携というのがひとつの箱の中に六冊ぐらいい入っております。そのクラブ奉仕の冒頭に、ロータリーの奉仕はクラブ奉仕から始まるというように書いてあります。

亭亭たる椰子が生えて、天に向かって聳えており、葉が笠のように被さって、颯爽として涼気を誘っています。その下には鈴なりにも実がなっています。これをロータリーに例えて見ますと、この木全体がロータリークラブであろうかと思えます。苗から肥培管理をして育ててきて、やがて背が高くなって幹が太くなって一人前の椰子に育つわけです。奉仕と言う葉が、あるいは鈴なりになって実ってくるわけです。しかしここで肥培管理をフォローするのを怠りますと、どうしても木は弱ってしまいます。場合によっては枯れてしまう場合もあります。ですからフォローする、これもひとつのクラブ奉仕ではなかろうかと思えます。言いますならば、

非常に息の長い、初めから最後までクラブがある限りやらなければいけない、難しい奉仕ではないかと考えております。

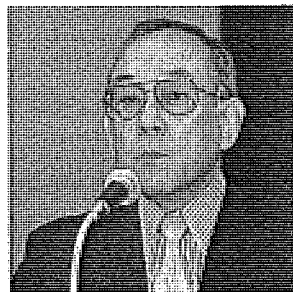
ラビツアR I会長はロータリーはどこに行くかということをおっしゃられました。そして11月号のロータリーの友には、この2年間数十年にわたって、増強を遂げてきたロータリーも会員が減って、幻滅を感じて毎年10万人の会員が辞めていくのは、これは何だ！ということが書いてありました。1967年6月の公式記録によりますと121万人会員に到達しております。ラビツアさんが会長になられましても、減り続けておまして、去年12月の公式記録によりますと117万人です。マイナス4万3千人ぐらいです。その前の十年間は18万人ぐらい増えていきますから、格差は22万人ぐらいになります。決して小さくありません。これ以上減っていくとどうなるかという懸念があります。

クラブをどんどん増やせ、そうすれば全国の会員も増えるだろうと、どんどん拡大してきましたけれども、減る方がそれを超過しているという現象がここに来ているわけです。拡大なのかクラブの充実なのか、問われるところだと思います。

我が地区も4千500人まで落ちてしまいまし

た。それよりも私が気にしますのは、出席率の低下で、現状は87%です。おそらくサッカーで言いますとイエローカードを渡されている状態だと思います。

それで今期クラブ奉仕のコーディネーターをしておられます佐藤千壽さん、大変失礼致しますけれども、ご自分が書き下ろされましたロータリーの原点というのを協定にされ、抗議をされたということでもあります。毎回のロータリーの例会は果たして人づくりの道場になっているのかどうか。話題はほとんど会員増強と財団寄付とお楽しみゴルフではないかと言うだいぶ厳しい意見です。更に期するところは、会員個人の人格の淘汰と自己錬成の場に他ならないはずだと書かれております。更に人はいかに生きべきか。日々普段に自らに問いかけてこの答えを導くところがロータリーであり、これがロータリーの人づくりであるとおっしゃっております。



パネリスト
日野晴雄

地区職業奉仕委員長（東京中野RC）

日野でございます。本日与えられました『新世紀を迎えるロータリーの姿』というテーマから、職業奉仕の観点から現況とその問題点、それから新世紀への展望の2点でお話をしてみましたと思います。

まず10月の職業奉仕月間に15クラブから卓話のご依頼があって伺いました。新しい会員、古い会員が混在しておりました。特に新しい会員で共通して言われます言葉が「職業奉仕は難しい、分からない」という表現でございました。

す。友情といい、出席率といい、倫理観といい、もう理屈ではございませんで、やはり例会に出て来て仲間と顔を合わせ、友達と懇談をしながら食事をする、お互いに影響しあって、そして自らの人間性を高めていくところが例会ではなからうかと思えます。もしそれが無いとすれば、もはや存在価値はないのではないかと思います。存在価値がないということになれば、他の組織に変えるか、もうやめた方がいいと思わざるを得ないのです。顔を洗い、心を洗い、心質すところが、私はロータリーの例会ではなからうかと思えます。

そういう心の問題を抜きにして、21世紀という新世紀を迎えるロータリーの姿というのは見えてこないような気がします。区切りがよろしいので、この辺で次の方にバトンを渡したいと思えます。ありがとうございました。

—職業奉仕委員会—

「社会に奉仕する ロータリアンを目指そう」

職業奉仕とはロータリーの最も重要な根幹理念であるということは皆さんお分かりだと思います。アーサー・シェルドンが言っておりますのは『最もよく奉仕する者、もっともよく報われる』大変簡単な言葉です。佐藤千壽バスターガバナーは『職業奉仕とは職業を通じて人を喜ばせることであり、人に幸福を与えることである』とおっしゃっています。ロータリアンになったらロータリアンであり続けて下さい。10年でも20年でも30年でもロータリアンを続けていると

いうことは、健全な経営を続けているという証だということです。つまり倫理観や道徳論で規制しなくても健全な経営をされていることは奉仕するという事に他なりません。従ってロータリアンであり続けることに誠心誠意努力をして下さいと申し上げてきました。

次に必ず各クラブで聞きました言葉が、アイ・サーブ（I SARVE）かウイ・サーブ（WE SARVE）かという話でした。先ほどカウンセラーもちょっと触れられましたけれども、アイ・サーブ（I SARVE）はロータリアンとしての絶対条件であります。アイカウイを選ぶのではなくて、アイサーブは絶対条件であるということです。そしてプラスウイ・サーブが必要条件であると解釈して欲しいと申し上げております。

2点目は職業分類の見直しです。職業も多岐にわたってまいりましたので、この職業分類を見直すことによって、新しい分野の新しい会員の入会促進に大きく繋げていく必要があるかと考えます。大いに見直しをしていただいて窓口を広げていただくことが必要ではないかと、かように思います。

3番目に会員同士の職業の相互理解が不十分で、詳しいことをお互いに理解していないということです。極端に言ったら何業かも知らないという会員同士のおつきあひがあります。これではアイサーブは可能かも知れませんが、ウイサーブの芽はここからは生まれてこないと思います。従いまして会員同士の職業理解を徹底することからまず始めていただき、各クラブが当然会員の名簿、ロースターを作るのと同様に、会員の職業を詳しく記載したものを作ったかどうか、各クラブ職業奉仕委員長に提案致しました。そこからまた別の切り口が生まれてくるのではないかと考えます。それと同時にロータリーが大事にしておりますあらゆる職業が、世の中にとって有用であるという理解にもつながります。従って職業の相互理解をぜひ進めたいと、一年間申し上げてまいりました。

4番目が奉仕プロジェクトの情報収集不足だろうと思います。まずコミュニティーにどんなニーズがあるのか、どんな情報を積極的に集めればいいのか、それから自分のクラブで何かできるのか、あるいは何を成すべきかということの検討をしていただいて、そして計画をしてい



「21世紀を迎えてロータリーの姿はどうあるべきか」
真剣な討論が展開された

ただきアクションにつなげるのです。

日常のコミュニティー地域社会の中から情報をできる限り集めていただくわけですが、その集めるシステムができていないのではないのでしょうか。集めた情報で奉仕活動の決定ができれば、すぐにアクションに移すのです。

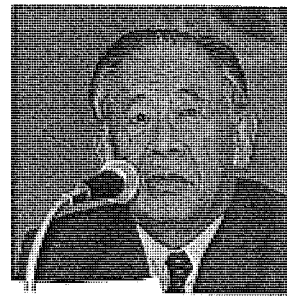
この4点が現状の問題点だと思います。実はR Iは全世界528地区ありますが、この中から400地区に職業奉仕委員会がありまして、その委員長アンケート、活動計画が報告としてまいりました。これを見ますと圧倒的に人気のありましたプロジェクト1番が、職業奉仕についての意識を高めるというのが88%でした。2番目の職業賞の授与が83%、大半がこれをテーマにしておられます。それから3番目が商業指導76%、4番目が職業関係活動でした。環境活動というのは、引退者と障害者の活動とか、職業倫理の高揚活動ですとか、薬物乱用、あるいはアルコール会員の防止ですとか、こういうことをひっくるめた活動が68%ありました。世界の400地区ではほぼ似たようなことをやっていると言われなくもありません。ところが盛田R I会長代理のメッセージにもありましたようにロータリーボランティア活動の更なる推進をして欲しいと要請がございます。もうひとつがロータリー趣味職業別親睦活動の一層の啓蒙をしてほしいという要請がございました。これは早急を目指していかなければならない方向だと思っております。

そこで新世紀への展望なんです、ロータリーもいよいよあと5年足らずで100周年を迎えます。この機に私が大変感銘を受けました一文がロータリーの友10月号に載りました。『ロータリーは創設以来100年近く、世界は大きな変化を遂げてきました。その変化の度合いは年々早まっている現実にも拘わらず、ロータリー内

部にはしっかりと伝統にしがみつくと窮々としている会員がいます。この塹壕に身を隠すようなやり方の結果、私達の組織は時代に取り残されてしまっています。もし私達が新千年紀において成長するには、言うに及ばず存続し続けようとするならば、私達の取り巻く世界に追いつかなければなりません。しかもそれは今すぐとりかからなければならぬのです。私達は区域限界、例会出席規程、職業分類、地区大会の実施方法など再考するときが来たのです。私達の組織に新たな活力を与え、会員の出席強化を図る抜本的改革を行うために、皆さん一人ひとりが変化する勇気を持って変化の実現に参加して下さい。私達は今ロータリーの歴史の重大な変換点に立っているのです』R Iラビッツァ会長の『変化する勇気』という一文です。

実はポール・ハリスもロータリーは時代とともに変化しなければならないと言っておりますし、直前ガバナーの徳増ガバナーも同様に、形式主義、権威主義、ルール偏重主義からの脱皮を目指そうと訴えておられました。従いまして、私は新世紀に向けて奉仕のスローガンを提言したいと思います。ご参考までにこんな言葉がございます。『わざわざ遠くの国の不幸に手を差し伸べるよりも、あなたの身近な不幸に手を差し伸べて下さい。奉仕とはお金が全てではありません。まず恵まれない方達に微笑みかけることです。』これがマザー・テレサの言葉です。もうひとつチャールズ・チャップリン『勇気と希望と、そしてサムマナー(僅かなお金)』という言葉がございました。

私の提言は『寄付に感謝されるロータリーよりも、社会に奉仕するロータリーを目指そう。そしてロータリアン一人ひとりが奉仕する喜びを実感しよう』この提言を以て私の発表にかえさせていただきます。ありがとうございます。



パネリスト
村瀬 泰雄
地区社会奉仕委員長(東京小石川RC)

村瀬でございます。

大きなテーマが『21世紀のロータリーはいかにあるべきか』という、そういう姿に視点を合わせまして社会奉仕関係、23、34と奉仕活動という点で考えを伸べさせていただきたいと思っております。

23と34の決議は大変難しい言葉で書いてあります。しかしこの決意こそロータリーの基本理念と言うのでしょうか、哲学、具体的活動の主旨を明確化したものだと思っております。その上に奉仕の実践に関しまして、個々のロータリアンと各ロータリークラブ、そして国際ロータリー3者の役割分担を明確に示したものだと思っております。

もちろんこれでロータリーの奉仕が具体的によく分かったというわけではございません。総論なり原則なりが分かったような気がするということでございます。もちろん奉仕とか超我の必要な、先ほど加美山パストガバナーがおっしゃったように、ロータリーはポール・ハリスさんが最初からの目的ではなく、最初はお互いに仕事上助け合うために昼飯でも食べようということが始まった、いわば互惠と親睦が始まりでした。それが大激論の末、最終的に23、34の決議で奉仕活動の基本が確立し明示されたものと理解しております。それに1932年の4つの法衣テストにつながりまして、それがロータリーの活動であり哲学と、すなわち理論と実践の基本になったと思っております。

それでは奉仕というのは具体的にどうかと言

—社会奉仕委員会—

真の奉仕とは— 小さなうねりがやがて大きなうねりに

われますと、大変に難しいのです。実はだいたい前になりますけれども、ロータリーとローターアクトと一緒に大公園の清掃がありました。広く呼びかけていましたので、家内と二人で参加しました。日曜日でしたので大勢のロータリアンが参加しているだろうと思いましたが、役員はほんの数人で、あとは全部ローターアクトの若い方だけでございました。汗を出すのも奉仕でありますし、金を出すのも奉仕、自分の仕事をしっかりやるのも、それが社会的に貢献しているということであれば、まさに奉仕でございましょう。どうもロータリーの奉仕とはいったい何だろうと、社会的にもあまり理解されていないと思われました。このへんに問題があるのではと、常々感じるわけです。

ロータリーの21世紀のあるべき姿を考えますと、ロータリーはまだまだ問題点が大きく分けて3つあると思っております。

ひとつは先ほど皆さんがおっしゃってました原点に帰るということです。つまりマンネリ化してはいないだろうかということでございます。

それから第二の問題点は、これも先ほどから出ておりましたけれども、会員増強難でございます。皆さん大変苦勞されております。ロータリーは原因が内部にあるということの論議がなかなか行われません。例えば簡単に言いますと「今の会費が高すぎるんじゃないか」とか、あるいは「出席がきつすぎるんじゃないか」とか、出席は本当に大事なことでございますけれど

も、ロータリアンがどこまで気づいているのかなと思います。それからまたリーダーがそれを理解させているんだらうかということです。「あんまり言うとか辞めちゃうから・・・」という遠慮もあるのではないかと思います。だからロータリーの全体のレベルが下がった、魅力がなくなってしまったと思われる。

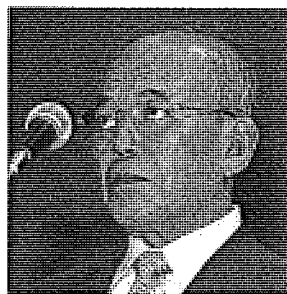
4番目は目的がよく分からないということです。単なる異業種交流なのか、奉仕なのか、奉仕とはどのような奉仕なのか、金を出すだけの奉仕なのか、汗を出す人がどれだけいるのか、あるいは金持ちの仲良しクラブではないのか、ソーシャルステイタスではないのか等、いろいろな問題がございます。こういう問題をやはり各クラブで真剣に論議をしてみて、それをひとつ吸い上げてみて、そこで方向を出していこうという事が、第二の点であります。

第三の点は、ロータリー自身が大変誤解をされているとっております。例えば私は社会奉仕委員会の72の各クラブに小・中学校の学級崩壊などについてという問題でご協力をいただき、各クラブとも汗を出してよくやって下さいました。しかしそういうことが社会に全然認識されておられません。ですから正しいPRという努力をしていかなければならないとっております。

社会奉仕委員会でございますので、奉仕のことを入れますと、金を出すのも奉仕、汗をだすのも奉仕であるとするならば、ロータリーの奉仕はどちらなのかと言われますと、それぞれの会員ができる範囲で両方するのが奉仕ではないかとっております。外国に行きますと、時々ロータリアンの方が街頭で一生懸命募金活動をしています。あるいは清掃活動もしています。

しかし今の日本でロータリアンの中の何割の方が実際に奉仕活動をしているかと言うと、やはり少ないと思われれます。ロータリーの会員の中には、汗を出す奉仕活動をしていることすら知らない方がいると思います。あるいは自分たちが街頭で募金活動やそんな奉仕活動なんかするのはおかしいと思っている人もおられるようで、ちょっと困ったことだと思っております。ロータリーであれば、お金を出すと同時に、汗を出す活動にも参加しようとする気持ちは持っていただきたいと思っております。

もちろんほとんどのロータリアンの方々には仕事を持っておられるし、仕事あつてのロータリー活動ですから、仕事が一番優先するということは言うまでもありません。従ってロータリーの奉仕活動というのは大きなことはできず、時間のあまりかからない小さなことしかできないとしても、その積み重ねというものが大きくなりとなり、力となっていくのがロータリーの奉仕ではないかと思うのであります。何かみんなが社会に役に立つことをやろうというこの気持ちが努力する気持ちを起こし、努力すれば忙しい中にも少しは時間を作ることができます。努力ひとつで、とてもできないと思ったことが、実はできるようになる。これは非常に大切なことです。そしてこの奉仕の努力の気持ちが起きる基盤は、やはり先ほどの4つのテストであり、ロータリーの基本はこの法衣テストではないかと思っております。この法衣テストを自分なりに身につける努力をすれば、奉仕活動とか、ロータリー活動というものとは何か自然とついてくるのではないかとっております。以上簡単ではございますけれども終わらせていただきます。ありがとうございました。



パネリスト

原田 良康

地区国際奉仕委員長（東京池袋RC）

—国際奉仕委員会—

一人でも多く、 地雷の被害から救おう

国際奉仕委員会でございます。テーマの『新世紀を迎えるロータリーの姿』とはちょっと違った話題になるかと思っております。本年度は対人地雷の除去の問題について取り組んでいます。これは新しく2580地区が取り上げる事業でございます。

まず国際委員会の所属する小委員会、4つの委員会からの依頼事項について一言申し上げたいと思っております。皆様ご存知のように、国際委員会の中の小委員会としては青少年交換奉仕、それから世界社会奉仕、ロータリー財団、米山奨学という4つの委員会がございます。地区内のロータリークラブの中で、この4委員会のうち、委員会のないクラブがございます。それは青少年交換委員会が19クラブ、世界社会奉仕が16、ロータリー財団が1クラブ、米山奨学が3クラブというように、委員会のないクラブもございます。小委員会のないクラブには、当然国際奉仕委員会がそれを直接担当していることになっているわけです。本年度より国際奉仕委員会としての委員会活動は、後ほど申し上げますが対人地雷に関するプログラムを担当しております。

まずその前に4委員会からのご報告とお願いを申し上げます。青少年交換委員会は当地区への来日留学生への受け入れは、公平さを期すために輪番制になっております。それから2～3年毎にお世話になっております受け入れクラブやホストファミリーの方々には、大変お世話になっておりますけれども、ホストフ

ファミリーの選定にはいろいろ問題があり、ご苦労されておられると思っております。来日留学生の不安を取り除くという意味からもできるだけ早くホストファミリーの決定をお願いしたいということでございます。昨年8月と12月の2回、全国の青少年交換委員長会が開催され、連絡や情報交換がなされたというふう聞いております。

世界社会奉仕委員会は、他の国の社会福祉プロジェクトを支援するにあたり、その国のロータリークラブ、又はその地区にプロジェクトを実施するためのしっかりした組織があるかどうか、そのプロジェクトの成功するか否かにかかっておりますので、これから世界社会奉仕活動を行おうとしているクラブは、その点を十分頭に置いて、相手国の状況を調査の上、実行に移し成果を上げていただくことを期待しておりますという委員会のコメントでございます。

それからロータリー財団は、寄付の件につきまして、昨年6月4日にロータリー財団セミナーにおいて会員一人当たり110ドルいただくことになったということでございます。各クラブにおかれましては、会員数の比率でご入金いただくようお願い申し上げます。現状報告と致しましては、9分区のうち4分区は昨年を上回っております。残りの2分区にも、ぜひロータリー財団寄付の基準に添っていただきたいと考えております。

次に米山奨学委員会ですが、3月下旬には各クラブに本年度の新規米山奨学生に対しての世

話クラブ及びカウンセラーの依頼を送り出しますので、依頼のあったクラブにおかれましては、ぜひ快くお受け致しますようお願いいたします。なお、特別寄付は随時受け付けておりますので、ご協力をお願い致しますということでございます。

それでは国際奉仕委員会として、本年度より直接的に活動しております当地区の対人地雷除去に関する取り組みの問題についてお話申し上げたいと思います。

このたび当地区の奉仕活動として新たに対人地雷除去支援のプログラムが加わることになりました。現在、地球上にはカンボジアをはじめ紛争地域が40カ所以上あり、60カ国にわたり1億4千万個とも言われる対人地雷が埋設されていると言われております。そして毎年子どもから大人まで、3万人に近い人々が地雷に触れ死傷していることは、新聞やテレビ等で皆様も既にご存じかと思えます。当地区では1998年3月に東京クラブメンバーの数名を含む発起人の下で、対人地雷除去活動に必要な後方支援を目的としたジャズ（JAHDS、セコムの飯田会長が理事長を務めております）日本の非営利組織NPOですが、人道目的の地雷除去支援の会を通して対人地雷の問題に取り組むことを研究するために、1998年9月にガバナー直結の対人地雷除去に関する研究チームを設置致しました。そして1999年7月には地区の正式委員会としてガバナー直結の対人地雷除去に対する特別委員会を設置して、現在に至っております。1998年から3回にわたって特別委員会及び国際奉仕委員会のメンバーがカンボジアの地雷源及び除去活動の視察に出かけ、今なお残留している地雷や不発弾によって日々命を脅かされながら困窮の生活を強いられている現地住民の様子を目の当たりにしてまいりました。まさしく大変悲惨な状況にあります。その結果一刻も早く、地雷により汚染されているカンボジアを中心とするアジア圏の土地を浄化して、次世代を担う子ども達が、安心して住み学ぶことができる家や学校を建て、農作物を作ることができる

クリアランドを造成する計画を検討致しました。地区内においては、地区国際奉仕委員会と共同体制を敷き、地区内クラブ会員にこの奉仕活動の事業計画を理解推進してもらうために、対人地雷についての卓話を積極的に取り上げてもらうよう、広報活動を開始してまいりました。現在までかなりのクラブが例会卓話、あるいは地区協議会等で対人地雷の問題に関心を寄せられ、取り組んできております。ご理解と募金活動も進んでまいりました。1999年12月に第2回カンボジア地雷源を視察した時に現地においてJAHDS及び実際の活動を行う英国系のNGOのHALO TRUSTと共に『ロータリークリアーランド』の構築の検討を行い、最も緊急性の高いカンボジア・シムリアップ郡のタシム地区ロハール村を『ロータリークリアーランド』の候補地と決定しました。JAHDSを通してHALO TRUSTに基金援助することにより、残留地雷や不発弾除去を実行することに致しました。ロハール村は現在人口905人、世帯数159で、1980年から1988年までの18年間にわたってクメール・ルージュと政府軍が死闘を繰り広げた激戦地でございます。この期間において数多くの地雷が敷設され、このためにこれまで1000人近くの負傷者と家畜が殺傷される被害を受けております。既に残留地雷地帯には行くところのない元住民であった難民約1000人が戻って生活しておりますけれども、人里離れた地域のため道路も寸断され、非常に孤立しております。

また他の国際支援団体も残留地雷による危険性が非常に高く、支援の手が差し伸べられずに、カンボジアでは特にこの地域が緊急の地雷除去活動が必要なところではあります。

本年2000年2月にこの事業計画を推進するための覚え書きが、当地区阿部ガバナーとJAHDS事務局長富田氏との間で調印が取り交わされました。覚え書きには事業計画の主旨、活動報告、除去費用の使途、活動現場の視察など、ロータリークリアーランドプロジェクトが適時に目に見える成果を把握できるための要綱が含

まれております。当地区では、ロータリークリアーランドのスタートとして、ロハール村の土地浄化資金総額4000万円の募金計画を立てました。本年度の募金目標は1000万円でございます。これは当地区の会員当たり2000円強の協力で達成できるかと思っておりますが、このロータリークリアーランドの目的はあくまでも地雷に汚染された地域の、一刻も早い復興と地雷犠牲者ゼロを目的とした対人地雷除去活動の支援のひとつとしてスタートしたばかりでございます。当地区では2004年関西でのRI世界大会に向けて対人地雷除去に関する特別委員会5カ年活動事業計画案を作成致しました。初年度は主旨目的の確定、広報及び募金活動の方法と実施開始、カンボジア地雷源視察、当地区ガバナーよりガバナー会議において対人地雷の取り組みについて報告提示をしてもらい、日本国内34地区への呼びかけをするということは、既に終了しております。

1年目は地区内各クラブ会員の意識調査、ロータリークリアーランドの候補地の確定です。2年目は、カンボジアにロータリークリアーランド設置、カンボジア地雷源視察、対人地雷の除去に関するミニ国際会議の開催などです。3

年目にロータリークリアーランドの運用の開始、カンボジア現地視察。4年目にロータリークリアーランドの実績の確認、カンボジア現地視察。5年目にして関西RI世界大会においてこの問題の提唱、対人地雷除去に関する国際会議の開催です。

この5カ年事業活動計画案を基に、今後は日本国内34地区をはじめ、やがては日本発のロータリープログラムが全世界のロータリープログラムとして波及していくことを期待しています。他地区への広報の一環として、ロータリーの友の6月号にRI第2580地区の対人地雷除去に関する支援への取り組みと題して掲載されますので、ぜひご覧下さい。特別委員会としましては、本日この会場の右側に対人地雷除去に関する展示場を設けて、資料なども用意しておりますので、お立ち寄りいただければ幸いです。

最後になりましたけれども、当地区では資料通り募金口座を設けてございます。会員の皆様あるいはロータリークラブにおかれましては、この事業計画の意義を十分にご理解いただいで募金のご協力をいただければ幸いです。どうもありがとうございました。



終わりに

加美山 節 パストガバナー

これまで4大奉仕部門それぞれご担当していただいているパネリストの方々に問題点を指摘していただきました。とにかくこの変化の時代に最適にロータリーをどうやって構築するかという問題につきましては、日本のロータリアンは大変まじめだけれども、保守的すぎるというご批判やら自戒やらがあるわけです。と言うことは私どもは、例えば奉仕につきましても、最近ロータリーの本部の方では、人道問題あるいは人権の問題に対する奉仕の傾斜が大きく見られます。ともすると日本のロータリアンはそれについていけないような出遅れてしまうようなところがあったと思います。その点も反省致しまして、奉仕活動の中身もそれに適した運用の

仕方が必要だと思えます。

今回は新世紀を迎えるロータリーの姿ということで、4つの奉仕部門にわたっていろいろお話を展開していただきました。大変幅の広い分野でお話をいただいたわけですが、いくつか具体的な提案もしていただきました。

私どもは変化の時代に、最も適したロータリーに構造変革を遂げていくということを新世紀に向かって、みんな覚悟を決めていきたいものだと思存次第でございます。

本日はこれをもってシンポジウムを終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

